

## 家族の絆の結婚式

昨年8月、私と同じ職場で働く社員同士の挙式を司りました。

彼らは、私が支配人をしていたときに入社した社員で、入社時からサービスマンとしての社員教育を厳しく指導してきた部下でした。

結婚式の3ヶ月ほど前に二人からシビル方式の挙式をしたいのでぜひミニスターをお願いしたいと頼まれた時には、これまでにないプレッシャーを感じました。それは同じ職場の、大勢の社員が列席する前でやらなければならないというところからくるプレッシャーでした。

上手にやらなければならないという思いが先に立ち、これまでのような平常心になれないのです。そこで心機一転、私は飾ることなく、職場の仲間の幸せを願う自分の気持ちを司式の祝辞で率直に伝えようと決心しました。

入社当時は右も左もわからなかった二人。一生懸命仕事を覚えようとしていたひたむきな姿。先輩たちの厳しい教育訓練に耐えて、立派に成長した二人。そのような経緯を、



▲飾らない2人の幸せを願う言葉が感動を生む

社員というより自分の子供の成長を喜ぶという思いをこめて心から二人の幸せを願う祝辞を述べました。

言葉を飾らずに二人への気持ちを述べたことが参列者の心に響いたのか、私の拙い司式と祝辞が多くの方々から涙を誘いました。美辞麗句で話すことよりも、幸せになってほしいと願う思いと言葉がどれだけ二人に、また参列者に伝わるかを学びました。

もう1つの感動は、新郎の

母が大事に指にはめていた結婚指輪を「さあ、あなたにパトタッチよ」と新婦用にアレンジした結婚指輪をつかったの、指輪交換に立ち会ったことです。

これから自分の娘になる新郎の母の愛情の溢れた行為もさることながら、挙式開始の冒頭に新郎新婦が行った事柄も素晴らしいものでした。

挙式会場に入るやいなや、新郎新婦は真っ先に両家の祖母に、「これまで愛情深く育

てくださりありがとうございます」と礼を述べながら花束をプレゼントしたのです。

私はこれほど素晴らしいシーンを目にしたことはありません。

二人は、自分たちが今日このように結婚式を挙げるのでできるのは、多くの人たちの支えがあったからという感謝の気持ちを表現したかったわけです。特に家族に対しての心遣いと気配りはたいへんなもので、私は司式壇で両家の家族の絆の深さに胸が熱くなりました。

私はこれまでに150組ほどのカップルの挙式を司りました。毎回、事前にヒアリングとリハーサルをしています。が、組数を重ねると、とにかく通り一遍やワンパターンになります。

この社員の結婚式を機に、私は挙式を挙げる二人からたくさん情報を仕入れて、それを基に司式の方法や祝辞の準備をすることを心がけるようになりました。

シビルウエディングの特徴は何といても司式者の祝辞が最大の売りだと思います。

これから新たな人生に向けて出発するカップルに対して心から幸せを願いながら、その場面に立ち会えた喜びに感謝して今後ともミニスターとして活躍していくつもりです。



シビルウエディング・ミニスター  
菅島洋二氏

(ささじま・ようじ) 1950年山形県生まれ。1999年シビルウエディング・ミニスターの資格を取得。

＜お詫びと訂正＞

9月21日号(第756号)の連載⑭シビルウエディング・ミニスターが語る「心にくる挙式」において筆者と異なるプロフィールを掲載致しました。正しくは「伊藤保(いとうたもつ)氏 1958年北海道生まれ。2004年にミニスターの資格を取得。翌年から挙式を行い、これまでに約400組の挙式を司る。」です。ここに訂正いたします。